偉大なダイバーの引退　２０１０、ｈ２２　9/17~24

また一人偉大なダイバーが引退していく。彼の名は宮本幸太郎である。いまだに日本のトップダイバーとしてナショナルチームメンバーにも名を連ね、今年で３２歳の最年長の選手の引退である。彼は日に日にうまくなって中学生の時、日本選手権で高飛び込み５位に入賞している。当時松任市で行われた松任国際兼日本選手権である。彼ほどコーチに叱られた選手はいないと思う。またそれなりに空気が読めない選手であったからだ。

陸上トレーニングを終えて今日も練習が終わり帰ろうとした時、ふと目に飛び込んできた一人の少年がいた。彼は競泳プールのスタート台にきょとんと座って考えているようであった。「幸太郎、どうした？」と聞いてみると「先生、ぼく迷っているんです。」とのこと「中学生になってサッカーをするのがいいか飛び込みをするのがいいか。ぼく迷っているんです。」ときたもんだ。一丁前に迷っているじゃないか。という感じでたのもしく思った。「あのな、体が小さい人はやはり飛び込みにいったほうがいいんじゃないか。」・・・
体は小さいがすばしっこさをもった少年。当時のライバルであったのは廣川雄一。米子市立明道小学校のエースストライカーとして名をとどろかせた人だ。今も境高校に勤務していて千葉国体にも監督兼選手として出場する。幸太郎いわく「ぼくはあいつより上手かったです。」後日、同僚である廣川氏に尋ねてみたら「幸太郎そんなこと言っていましたか」ととても愉快な時間を共有することができた。
当時の様子を振り返ろう。基一郎と幸太郎の間にもう一人秀二郎がいるという男ばかりの３人兄弟だ。私も３人兄弟の末っ子なものですから幸太郎の気持ちはよくわかるつもりでいた。まあ、何とも落ち着きのない、やかましい兄弟であった。柿の実をとるのも自然と木登りである。柿の木は折れやすいので心配していたが、当事者たちはかまわず一目散に柿めがけて突進していくのである。当時からよく夕食に招待されいろいろ作戦を練ったものであった。この兄弟が３人ということ２番目のみサッカーに進んだ。せっかく家に招かれて楽しい団欒になるはずが話題が飛び込みの話だけになってしまう。家族崩壊状態になってしまう。秀二郎にはサッカーシューズを買ってやった。「どれでもいいから好きなやつを選べ」と、じっと我慢のぼくでした。余談だが、秀二郎もいっとき飛び込みをやっていて「おれの得意技、みせちゃろか。」と得意そうに１ｍでインワード抱え型をやって見せた。現在は、ペルー人の「？？？」さんと結婚をして幸せに暮らしている。
また、ある土曜日の昼下がり小学生３人はアパートの鍵を閉めて何やらじっと部屋でビデオを見ている。しかも息をひそめて・・・・。普段はこんな時間に帰ってこない父・克範氏が「お前たちなにを見てるんだ。」と一喝。よくぞこんな時間に帰ってきてくださいました。と言いたくなるような瞬間でした。お父さんの物を勝手にみてはいけません。もう少し大人になってからにしなさい。
そんな幸太郎の第１関門。基一郎と自分は全国中学から全国ＪＯと大会をまわっていた。

全国ＪＯのお金２０万円もってきてくれということになった。夜行列車に乗ってびくびくしながら小学生はお金を米子から東京まで腹巻きに忍ばせて見事、現金輸送に成功したのであった。

中学３年の時
負けるはずのない全国中学校大会。彼はあっさりと足を台にぶつけてそこまで来ていた優勝という文字を手中にできなかった。そうこのときの１年生にその後日本を代表する世界のトップダイバー寺内健選手が登場したのである。彼は強い選手がいるときには弱く、弱い選手がいるときには強いつまり、相手を意識してしまう。相手の得点を意識してしまう。という弱点をもった選手である。その点、兄の基一郎は本来の（といわせて）試合に臨む姿勢、精神が素晴らしかったが弟にはなぜかそういう点が欠けていた。これも三男の甘さかもしれない。
冬場のトレーニング
「高校に入ったら髪を切るように。」と伝えたところ「何でですか？」と食って掛かってきた。今までスポーツ刈りでとうしてきたものだから高校に入学して髪を伸ばすことを夢見ていた本人が必死になるのもわからんではないけども。なんでかがわかるまでほっておこうと思ったがしつこいので「高校に入っても飛び込み競技を一途にするのだろう。他のことに気が向かないようにするためだよ。」とやさしく肩に手をかけながら語ってやった。それからしばらくして幸太郎の髪は短めに徹した。宮本家の散髪代を計算したことがあった。宮本家ではお父さんが３人の息子の髪をスポーツ刈りにしていた。お父さんの腕前も大したものだった。当時、基一郎に練習中「もっと考えろ」のようなことで叱ったことがあった。「お前の頭は何のためについているんだ。」すると彼はすいすいと答えるのである。「えっと、ヘルメットをかぶるためと、たたかれるためと、散髪をするためです。」「なるほどそうだったのか。」と納得したものであった。

数々の日本タイトルを手中にして日本代表として海外へ出て行くのだが思うような成績が結局はとれずしまいであった。サザンクロスサーキットに５年続けて参加した。ある年前の中国遠征で知り合いになった、シュー・ハオという少年と逆立ち競争をしたことがある。どちらも譲らなくて決着がつかないまま終わった。シュー・ハオはその後中国代表になった。

高校何と言っても高１富山インターハイ、高２鳥取インターハイ、高３広島国体であろう。１年の時富山インターハイでのこと審判員できていた私は、彼が朝「おはようございます」といった瞬間彼の頬を張った。というのは昨日のこと板の試合で彼が前宙返り２回半を膝抜けしてほぼ０点であった。結果３位に甘んじてしまった。そこまでは仕方のないことだ。誰だって膝抜けする時だってある。問題は宿に帰ってからのことだ。私は審判な

ので別々の宿であった。彼は部屋に大の字になり「あー、ちくしょう。失敗しちゃった。」と大声で叫んでいたという。情報を他の先生から聞いていたので、カチーンときた。畜生という言葉はそんなに簡単にはくものではない。逆に体にためて次に生かす。そういうものではないのか。コーチから離れての宿泊という場で羽を伸ばしすぎたのであろう。もう少しなぜ、失敗したのか。なぜ、膝抜けしたのか。ということを考えてほしかった。そう考えてみると膝抜けしたことが失敗ではなくて、その前に失敗の要因がみえてくる。

平成７年、高校２年。鳥取インターハイである。この年のインターハイは最高に感慨深い大会であった。大会を１カ月後に控え優勝宣言をしたのである。しかも手首の故障（という程度のものではないのかもしれないが）であまり多くは飛ばせられない。１本１本を大切にしかも意味のある１本を飛ぶことに集中した。この大会は試合運びという点で大いに意義のある大会であった。１カ月の練習は１日に板も高も１~２本回しであった。残りの１カ月間は試合を想定して通告付きで行ったのである。しかもその通告がたまに間違うのである。その都度、選手が審判長に間違っていることを伝えなければならない。そういう練習もした。最初の１～２週間は静岡のＹ選手、岡山のＫ選手、茨城のＳ選手らが宮本幸太郎の前に同じ種目を必ず決めて高得点をあげていく。宮本はどう頑張ってもいくら決まっても勝てない状態。３週間目なかなか追いつくことができなかった選手たちと得点が同じくらいで対等に勝負している状態。４週間目しあげの週である。宮本の得点が相手より勝っている状態。宮本自身は今までと変わらないが相手が失敗をしてしまう。どうしても勝つ、必ず常に勝っている。そんな状態を想定して練習した。まさに敵なし状態のインターハイであった。練習と同じように首をぐるりと回して動作に入って行った。そんな中スーパーダイブがあった。高の３０５Ｂ、彼の得意とする種目である。審判の得点で１０点がでたのである。私の目から見ればやや膝がまえにでたことが気になったが・・・。後日行われた全国ＪＯ大会では完璧な飛び出しであった。入水も音だけであった。水しぶきというものがなかったのである。実際に台の下にいた子供たちは何が落ちてきたのかわからなかったのであろう。水の中から幸太郎がでてきたものだから驚きの表情、そして歓喜。そんなスーパーダイブもあり安心して見ていることができた試合であった。彼の飛び込み人生で最高の演技はどれか。ランクを付けるとすれば間違いなく１位にこの飛び込みを選ぶであろう。それほど素晴らしい演技であった。

高校３年、広島国体。実は国体の前の全国ＪＯ大会でのこと台に頭部をぶつけて７針位ぬっていた。抜糸が国体に間に合うかどうか。どうにかこうにか抜糸は間に合った。入水で頭などに衝撃を受けるとまた、頭が割れる可能性がある。国体に入る前私も必死になってどうすれば頭に衝撃が少なくて済むかを考えた。サランラップで頭をぐるぐる巻きにしてキャップをかぶらせた。練習はというと、実際には水に入らないでイメージトレーニングで行った。板に上がりハードルをしていき、飛び出す空中のイメージは板の先端で入水に入るまで、それで降りてきて水に入って、頭をつけずに水から上がって一本のイメージが終了する。一本一本を確実に決めるため、あらゆる手を打ったものだ。そして大会が始

まり水を得た魚のようにいきいきと飛んだ。そして最後の前宙返り３回半えび型、高校最後の種目である。彼はキャップをぬぐい捨て最後を締めくくった。

平成２２年、千葉国体。前半３本は失敗するはずのない種目である。思うように点は伸びなかったがまずまずの演技であった。問題は後半の３本、いや、後半４本、５本目を何とかしのげばいける。いらん心配であった。４本目ノースプラッシュ、８０．８５点。５本目７９．２０点と続けざまに８０点ダイブをやってのけたのである。こうなればいけいけムードではあったが、最後気を引き締めて決めてこい。と送り出した。最後の６本目、８２．５０点で得点合計は４３３．６５点。過去最高の得点をあげていた。まさにスーパー３２歳である。また、９月１４日付けの日本海新聞の写真が気に入った。抱え方をとって宙返りをしている写真である。これは４本目の後宙返り３回半で８０．２５点を得点したいわば運命をわける飛び込みである。写真の宮本の表情がいい。顔面に力が入っていないのである。水をしっかりと見ている。顔面に力が入ると肩に力が入ってきて宙返りの力バランスが崩れる原因になる。飛び出しのラインをしっかりとつくってから飛び出した証拠である。こういう飛び出しが最近なかなかできないものであった。そして入水がぶれてしまう。いずれにしてもこの飛び出しは力の配分といい最高の飛び出しであった。

終わりよければ、すべて良し。これで昨年棄権したぶんも良しとしよう。この日の夕食は幸太郎の引退の日ということもあって、大学の恩師、大坪敏郎先生宅の町田に千葉から２時間かけてお邪魔した。鳥取県チーム全員でお邪魔した。鳥取県出身で日本の飛び込み競技界になくてはならない先生である。あの独特なおおらかな指導法は他の追随を許さない。いろいろな話がはずんで愉快なひと時を得ることができた。

ある新聞に彼は「先に生まれた人はみんな先生なんだ。」という心境になったということが書かれていた。「我いがい、みな師なり」これは宮本違いである、宮本武蔵の五輪の書のなかに書かれている言葉なのである。（確か）この境地になった彼はこれから指導者として指導者たる道を歩んでいくのであろう。決して踏み外すことなく・・・。そう期待している。